

最優秀賞
文部科学大臣賞

境界線のない心で

〔栃木県〕

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 2年 関 桃羽

私は毎日安心して学校に通い、ご飯を食べ、家族や友達と過ごすことができている。しかし、もし突然「日本で暮らしてはいけません」と言われたら、どう感じるだろうか。実際に、そんな状況に置かれている人が日本にもいる。難民認定を受けられず、仮放免のまま暮らす人たちだ。

私が初めて「難民」を知ったのは道德の特別授業だ。資料の中に、8歳で家族とともに中東から逃れて来日したライラさんの話があった。彼女は7年経った今も仮放免の状態で、一家は働くことが許されず、県外へ出ることも制限されている。そのため修学旅行にも行けなかった。私は次の春に修学旅行に行く。半年以上先のことだが、今からどこに行こうか何を買おうかと友達と話題にすることも多い。その時のライラさんの悲しみと疎外感はどうほどのものだっただろうか。私は、日本は平和で外国人にとっても暮らしやすい素晴らしい国だと思っていたので驚きを隠せなかった。それと同時に自分が知っている世界の狭さを感じた。

私は今まで自発的に何かを起こす方ではなかった。しかし、「このままでいいのか?」という気持ちが心の奥から湧いてきた。もっと知りたいと思い、東京弁護士会の難民PTの講座に参加した。入管収容を経験したサファリさんの話や、改宗により命を狙われる人、LGBTQであることを許されない人、政治の対立や文化の違い、紛争や迫害など様々な事情により難民申請者に

ならざるを得なかった人々が日本で厳しい状況に置かれていることを初めて知った。外国人が治安を悪化させると考える人もいるが、私たちは難民に対する正しい理解が必要だと思う。命を守るために祖国を離れなくてはならなかった被害者なのだ。授業では、人間には生まれながらにして等しく人権があると学んだ。つらい経験を抱えながらも希望をもって来日した彼らが安心して過ごせる第二の故郷に日本がなることを願う。

働けないとお金がない、お金がないと食べられない。支援の一つに食料の提供があると聞いた。すぐにフードバンクに連絡をとり、食品配布会に参加した。言葉は通じなくても、笑顔で帰る姿に心が温まった。家庭で余っている食べ物を持ち寄りまとめて寄付するフードドライブ活動なら私にもできる。通っている中学校を巻き込んでこの活動をすべく奮闘中だ。

今の私には、法に基づくアドバイスも直接的に難民認定の支援をすることもできない。しかし、中学生の私の言葉だからこそ耳を傾けてくれる人がいると思う。少し前までは知らなかった世界の話。決して遠い国のことではない、たしかに今この国で起きていること。私の発信が広い世界に届くことを願って。

私の将来の夢は弁護士になった。難民支援PTで聞いたある言葉が忘れられない。

～安全に生きたいと願う心に、生まれた所は関係ないから～